定数と幼児教育について

海　卓子

はじめに

いま、小学校の一学級の定数の四十五名を四十名にするかしないか、という問題でゆれています。

一教員について、幼児何名が妥当か、という問題は、教育の基礎的な条件、即ち、子どもの教育環境、家庭や社会の在り方、施設の環境や設備などと共に、教育内容を左右する大切な条件の一つです。

しかし、純粋に教育上からこれを論じることは少なく、公私立を問わず経営上の問題を含めて検討される場合が多いようです。今回の小中学生の児童定数の場合も、国会の議員の質問に対し、〝予算の関係上四十名定員は無理〟と、答弁されています。

一、定数の意味するもの

定数は保育上、どのような意味を持つものでしょうか。

。「金」の心配の方がよい

一九四九年、国立教育研究所付属幼稚園は、「研究所で学校を経営するのは好ましくない」というGHQの指示で、他の国立大学等に移管されるという問題が起きました。在園、修了を含めた百名足らずの父母は、「移管は、移転を意味し、地元の者にとっては、廃園も同じ」として、現状のままの存続を熱望し、移管反対運動が盛り上りました。地元の小学校長をして居られた大石先生は、〝海さん、公立幼稚園にしないかね。よければ話してみるけれど―。〟と。たしかに公立幼稚園にすれば、親の負担は少なくなります。しかし、現状の保育内容が維持できるでしょうか？　私は〝先生、現在四歳児二十五名、五歳児三十名ですが、この定員を守ることができるでしょうか？〟当時公立幼稚園は一組四十名でした。先生〝無理だナー。やっぱりだめか！〟ということで、遂に私立幼稚園として再出発することにきめ、一九五一年八月、現在の土地に私立白金幼稚園が誕生したのです。

園舎は、軍の馬小屋を五万円で買取り、そのまま移築し、当時、見学の人々に〝村役場みたい〟と驚かれました。それでも保育内容だけはどうやら維持することができたのです。

。一人三十名で、よくそのような保育ができますね

一九七五年頃、カナダから、幼稚園を経営しているという女性の大学の先生が一日保育を見学されました。私が、教師は教えこむのではなく、遊びや労働を手がかりに、その可能性をひきだすものである、と説明すると、〝一組、何名ですか？〟という質問が返ってきました。〝原則的に三十名〟というと、目を丸くして、〝自分のところでは十七、八名を助手と二人で保育をする。この人数でよくそのような保育が出来ますね〟と、痛いところを突かれました。いうは易く、行うは難し。数年以上の保育歴を持たなければ実際には無理でしょう。

このように定数の問題は、保育内容と切り離しては考えられない重要な問題です。

ここでは、保育者の立場から、保育者一人当りの幼児の人数、又は一園当りの幼児数を取上げて、その意味を考えてみましょう。

二、定数を左右する条件

。人数が多い、ということは――。

子どもの後姿を見ても、すれちがった瞬間でも、自然に〝○○ちゃん〟ということばが出てくるようでなければ、子どもの心を捉えることはできないでしょう。私はこの数年来、対外的な仕事に追われ、子どものなまえが覚え切れず、つい胸の名札に目がいきます。年長児ともなると、子どもはツト名札を手でかくし、〝誰だ？〟と、逆に私に呼びかけて先生をテストします。笑い話としてはおもしろいが、これは教育以前の問題で、保育になりません。組を担当していれば、どうやら一五〇名位までは母子のなまえがわかりますが、それ以上はお手上げです。弟妹関係、交渉の多い子ども、又は学年に限られ、路上で会っても、つい形式的な挨拶に止ってしまいます。

欲をいえば、先生の一人一人が全園児のなまえが覚えられてこそ、何時でも、どこでも、居合せた人の適切な助言が可能となるでしょう。子どもの年齢が低ければ低い程、その場で、即刻働きかけないと受止めることが出来ないのです。こう考えますと、一組の定員もさることながら、一園の定員を何名でおさえるか、という問題も出てくるのです。

仮に三歳から保育するとして、三歳児十数名を二人で、四歳児は二十五名二組、五歳児は三十名二組、計五組百二十名余となりましょう。

これを新卒一名、他に数名の保育者で担当するとすれば、最もやりやすい規模といえましょう。

。やる気のない子どもたちを抱えて

終戦直後、或は戦前も同様ですが、至るところに焼跡、又は原っぱなどがあり、路地裏でも、道路でも、近隣の子どもたちが、よちよち歩きから、少年に至るまで、屯して遊んでいました。仮に定員三十名としても、子どもたちは既に入園前に、鬼ごっこ、けんかなどの手ほどき位はできていました。ですから、今の子どもたちのようにゼロから一つ一つ教える、という手数は省かれていたのです。三歳児も二学期になれば、「鬼ごっこ」が子どもたちだけで出来、年長組の二学期には、「開戦ドン」（遊軍、守備、援軍というように必要に応じて役を分担し、敵とドンをして勝てば、相手を摑まえることができる。）という集団鬼ごっこが、自然発生的に登場し、三十名が二手に分れて、それぞれ登園する子どもを待ち構えていて自分の仲間に入れる、ルールもおもしろくなる

ように、ジャンケンで負けても「死マナイ役（死ナナイ役、即ちとりこにならない意味）を作り、次々と発展させていきました。この時代の三十人と、現代の三十人とでは、質が全然ちがって、今の三十人の方がズーッと手がかかるのです。

遊ぼうとしない、友だちとの遊び方を知らない、ものの取扱い方がわからない、又、一寸転んでも手をつかず、頭を地面にたたきつけて大事になって医者騒ぎをするなど、教師の眼がたくさん必要となります。

○保育者の指導力と定数

保育者の場合は中学や高校の先生とちがって、子どもと一緒に遊んだり、働いたりしながら、子どもを好ましい方向に育てあげていくのです。ですから先生自身も手足が動き、遊ぶことが面白くないと子どもはついてきません。ところが今の先生は、子どもの時から受験勉強に追われて、家事も手伝わず、遊んだことも少いというのです。ここに、先生も子どもも遊べないという状況が生れます。先日も大学で「メデシンボール」を子どもたちがどのようにするか、という話をしたら、〃メデシンボールって、何ですか？〃ときかれ吃驚しましたが、大半はこれを知りませんでした。新卒の先生が、何十人かの子ども一組をまとめて、自然に自分の意図する方向に誘導することができるようになるのには、大体三ヶ年が必要です。更に親の質問に答えて納得させることができるようになるのには、少くも五ヶ年かかるでしょう。ここで初めて専門職といえるのでしょう。しかし実際に若い人々の平均勤務年数は、三ヶ年やっとと、いわれています。数人の先生がいればその半数は指導力が弱い、とみてよいでしょう。ここでも亦、一組の人数が問題となり、原則的に三十名としても、経験年数の少い場合は三十名以下にし、子どもも扱いやすい子どもを多くするような配慮が必要でしょう。又、いつも級単位に保育をせず、経験者と一緒に組を交ぜた保育をしたり、遊び別のコーナーを作って小人数保育ができるような工夫もしなければなりません。

三、スピード化、能率化、機械化の中で

大正初期に小学校一年生一組の人数は東京で四十人～四十八人位までありました。それでも、先生は休み時間には子どもと遊び、土曜、日曜などは、子どもが先生の自宅に遊びに行き、夕刻に帰るということもしばしばでした。担任の女の

先生は赤ちゃんを抱えながら、放課後から六時頃まで受験のための予習をされ、学校の窓から眺めた夕月の美しさが今でも忘れられません。保育所もなく、家事労働は一切手仕事なのに、子守り一人を置くのみで、どうしてこのようなゆたかな生活ができたのでしょうか。ところが今はどうでしょう。

○年々人間関係のうすれて——

保育所、幼稚園の普及と家事労働の機械化等により働く女性もふえ、女性の自家用車運転も日常のこととなり、一見、その暮しが向上したかに見えます。しかし手仕事が消え、狭いマンションに閉じこめられた母と子の交わりはうすく、先生と子どもの人間関係も稀薄になり、テストの点数に振りまわされる異常な生活が展開されることになったのです。

小学校で教育実習をした或女子学生が「落ちこぼれの子ども」をめぐっての記述の中で、「実習生だから落ちこぼれの子どもの相手が出来たのであって、一組持っていたら、到底できることではない」として、四年生担当の男の先生の一日の暮し方を記していました。担当の先生は朝七時三十分に出勤、朝礼の前にその日に使うプリントを印刷する。実習生の記録、教案に眼を通しチェックする。八時職員会、八時半から授業開始、十二時三十分から給食指導、昼休み二十分、授業間の十分の休みを含め、その日に返す宿題などの宅習の点検、子どもと遊ぶことなどは全然考えられない。五時限目の授業が終ると、帰りの会十五分。このあとは職員研修、又は職員作業、全校児童のダンス、体育などの分担指導。毎日兎の目のような赤い眼をして登校、一日中走り回りながら〝たまらんですわ〟の連発という。

このように子どもの生活と教師の生活が大きく変れば、人間的なふれあいの時間は逆に少くなって、唯々、点数に気をとられてウロウロするようになり、児童の数を少しばかり減じても、教科書を何頁かうすくしても、ほんとうのゆとりは生れないのではないでしょうか。幼児もそのあおりを受けて、ワークブックが横行し、三歳から塾に行き、進学塾通いは四歳児から始まり、週に空いている日は一回のみ、などという笑ってすまされない話も出て来ます。

定数問題の裏には、どうやって歪められた生活を変えるか、という大きな課題が横たわっているのです。子どもと子どもが、子どもと先生が、子どもと母親が、人間的にふれあえる生活の中でこそ、初めて定数が生かされる、ということになり、暮し方の検討まで含めて考えられなければならない

と思います。

四、人間らしい子どもと大人のつきあいの中で定数を考えよう

○人のいっていること、していることを見たり、きいたりする感度を育てよう

先日も小学校学芸会をみて考えてしまいました。七百人位の子どもたちが、次々に展開される歌や劇を見ていますが、性能のよいマイクから流れ出る挨拶や、せりふが、子どもたちのざわめきに阻まれて時々ききとりにくくなります。とたんに私は自分の小学校時代の式日風景を思い出しました。千人余の全校生徒が時に遠慮勝ちな咳払いがきこえる外は、低い校長先生の話し声の一句一句がききとれたものでした。どうしてこのように騒がしくなったのでしょう。

集団とか、社会性とか、やかましくいいながら、現実には自分本意に行動してしまう今の教育が、はっきり浮出ているように思いました。

○人と人との信頼感を取りもどそう

或研究会で、子どもの未分化な自己中心的な考え方から発生するけんかは、大人と異り相手とのぶつかり合いを通さなければ、他人の存在に気付かず、相手の気持を理解することもできない。ですから「けんかはいけないと、きめてかからないで大したけがでない限り、やらせてしまったらよいのではないか、と申しました。若い先生が質問に立って、〃お話はごもっともですが、もし、けがでもさせたら、あとが大変なのでつい、させることができません。部屋にとじこめて、けんかもすぐ止めてしまいますか――。〃これも無理からぬことです。この頃のお母さんは「我が子意識」がつよく、けがやけんかをしたりすると、〃先生、見ていらっしゃったのでしょうか？〃と追求します。十年位前までは、同様の場面で〃うちの子は腕白で――〃〃どうぞ、叱って下さい〃〃あちら様はおけがはなかったのでしょうか？〃などという言葉が返ってきました。今は〃うちの子はわけなく人様をたたきません〃というように、子ども中心の考え方に変っています。自分は正しいという考えが先に立って、相手への冷い批判が目立つのです。

互に相手を信じ、自分を反省する態度を忘れないようにしたいものです。自分中心的な考え方しか出来ない子どもはよけいに自分勝手になるでしょう。

○子どもの実態をよく摑もう

気のつよい子どもがのさばれば、気の弱い子どもたちは傍にも寄れずさけて通る。或は何をされても文句をいわないので、ますますのさばるという悪循環になります。ここで教師はどの組の子どもでも身辺に起きた事実をリアルに捉えて、やたらに「よい」「わるい」をきめようとしないで、誰が、いつ、どこで何をしている時に何が起きたのか、その動機、原因をたしかめ、どうしたらよいかを考え合うようなたしかな、ゆとりある保育をしたいものだと思います。

二月末に年長組の子どもたち七、八名が、階段を利用して鬼ごっこをしている。何があったのかT郎（六才一ヶ月）は、同組の四人の男の子に囲まれて責め立てられている。とうとうT郎は泣き出してしまった。通りがかった私は〝どうしたの？〟と声をかけるとA次（六才一ヶ月）〝ダッテ、僕タチ遊ビヲ難シクシテヤッテイルノニ、T郎チャン〝入レテ〟トイウカライレテヤッタラ、マチガエテバカリイルンダモン〟私〝そんなこといったって、一人の子どもを、四人でよってたかってワイワイいえば誰だって泣くでしょ〟とたしなめる。T文（六才）は通りかかったY行（六才八ヶ月）を呼び止め、四人にガヤガヤと文句をいわせる。T文呆然としているが泣かない。T文〝ホラ、四人デイッタッテ泣カナイダロ、証明デキタヨ！〟といって得意になる。私は思わず〝証明になんてならないわよ。Y行ちゃん何のことかわかる？〟Y行〝ワカンナイ〟といいすてて去る。あとで私もおかしくなって関係のない人つかまえるなんて――、というが子どもたちはピーンとこない様子。子どもにはこんな証明の仕方もあるのですね――。

問題は、とかく馬鹿にされ勝なT郎のよさをどうやって子どもたちに認めさせるか、A次の思い上った態度を何を手がかりにして反省させるかということです。このためにはT郎A次について、それぞれの長所と短所を先生自身がはっきりと摑まなければならないでしょう。組の先生とも話し合い、この子どもたちと遊んで、具体的な今後の指導方向を発見しなければなりません。このような保育が出来るような定数ということを考えてみたいと思います。

（白金幼稚園）